

聖書:列王記第二15章1～12節

説教:主が王を打たれたので

はじめに

いつものように前回までのあらすじを簡単に振り返ります。北イスラエルの第十三代の王となったヤロブアム二世は、信仰者としては「主の目に悪であることを行なった」者と言われましたが、政治家としては大きな力を振るい、外国に奪われていたイスラエルの領土を取り戻すという業績を残しました。ヤロブアム二世が軍人として飛びぬけた能力を持っていたというよりも、実はその背後には神の助けがあったからだと言われていると聖書には書かれています。主の目に悪であることを行っていた王であったのに、なぜ神はそのような王を助けたのか。外国から侵入してくる略奪隊に襲われ、人々が苦しんでいく。その様子をご覧になった神があわれんでくださり、このままではいけない、あなたがたは生き延びなければならぬと思われ、それで救って下さったのだということです。

今日はその続きとなり、ここには南王国のアザルヤと北王国のゼカリヤ、このふたり出てきます。彼らはどのような王で、神はどのように関わっておられたのか、ともに見てまいります。

## 1 南ユダ：アザルヤ王

### 1) 父アマツヤ

まず最初は南ユダ王国の第十代目の王となったアザルヤです。3節で、「彼は、すべて父アマツヤが行ったとおりに、主の目にかなうことを行なった」とありますが、彼の父はいったいどういう人物であったのか。アマツヤは最初、信仰を守っていたのですが、じょじょに成功をおさめていくうちに高慢になり、北王国のヨアシュから、「あなたは心が高ぶっているから、おとなしく家で黙っていなさい」といさめられても、聞く耳を持たず、結局最期は部下に裏切られて暗殺されていく。それで息子のアザルヤが王となったという経緯がありました。

### 2) 主の目にかなうことを行なった

そのアザルヤについてはこう書かれています。

3, 4節。「彼は、すべて父アマツヤが行ったとおりに、主の目にかなうことを行なった。ただし、高き所は取り除かれなかった。民はなおも、その高き所でいけにえを献げたり、犠牲を供えたりしていた。」

二つのことが書かれています。一つ目。彼は主の目にかなうことを行なった。二つ目。ただし、高き所を取り除かなかった。「高き所」とはなにか。簡単に言えば異教の神々を拝んでいた場所のことで、皆さんの身近なところにもあります。たとえば北海道神宮は、円山公園駅から行くと分かりませんが、緩やかに登った場所に建てられています。モンゴルに行くと見晴らしの良い丘の上に石を積み上げ、真ん中に木の柱を建てているのを見かけます。オボーと言ってやはり神々を拝む場所だそうです。イスラエルでもそうしていた。もちろん律法に反することですが、アザルヤはそれを残したままだった。

### 3) 主が王を打たれたので

そんなアザルヤがどうなったか。5節。「主が王を打たれたので、彼は死ぬ日までツアラアトに冒された者となり、隔離された家に住んだ。王の子ヨタムが宮殿を管理し、民衆をさばいた。」

これを読んで不思議に思うかもしれません。アザルヤは高き所を取り除かなかったとしても、主の目にかなうことを行なったと言われているのです。それなのになぜ主は王を打つのか。ここに何も説明がありません。そこで並行箇所である歴代誌第二を読むと、詳しく書いてある。26章16節を読みます。「しかし、彼が強くなると、その心は高ぶり、ついに身に滅びを招いた。彼は自分の神、主の信頼を裏切った。香の壇の上で香をたこうとして主の神殿に入ったのである。」

神殿には祭司だけ入ることが許され、例え王であっても許されない。ところがアザルヤは勝手に神殿に入り香をたこうとして、神殿から出て行かない。その結果ツアラアトに冒されてしまい、生涯隔離された家に住まわなければならなくなった。そういうことでした。

これと似たような話し、どこかにありました。父のアマツヤです。この二人は、最初主の目にかなうことを行っていても、強くなっていくと心を高ぶらせ失敗するという道をたどっていきます。でもどうでしょうか。アザルヤが表に出られなくなると、今度は息子のヨタムが代わりに民衆をさばきます。父親が失敗してもその息子が次の王となっていく。こうして王の血筋が途絶えることはありません。

ん。このことは北イスラエルと比べるとはっきりわかります。

## 2 北イスラエル：ゼカリヤ

### 1) 父ヤロブアム二世

そこで北イスラエルの十四代目の王ゼカリヤに目を移します。彼の父ヤロブアム二世は最初に触れたとおり、信仰的には主の目に悪であることを行っていました。神のあわれみによって外国に奪われていた領土を回復するという業績は上げた人です。

### 2) 主の目に悪であることを行った

その息子ゼカリヤはどうであったか。9, 10節。「彼は先祖たちがしたように、主の目に悪であることを行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの罪から離れなかった。ヤベシュの子シャルムは、彼に対して謀反を企て、民の前で彼を打ち殺し、彼に代わって王となった。」

ゼカリヤも父と同じく「主の目に悪であることを行い」、国民に対しては初代ヤロブアム一世が造った金の子牛を拝ませます。そのゼカリヤの王座はたった六ヶ月で終わり、シャルムの手で暗殺され、そのシャルムもたった一ヶ月しか続きません。めまぐるしく王位が変わっていきます。

### 3) エフーに告げられたことば (10章30節)

ここで気になるのは12節です。「主がかつてエフーに告げられたことばは、「あなたの子孫は四代までイスラエルの王座に着く」ということであつたが、はたして、そのとおりになった。」

ゼカリヤの何代か前の先祖にエフーという人がいます。エフーは預言者エリシャによって王となり、当時北イスラエルにはびこっていたバル礼拝を掃するという華々しい業績を上げるのですが、ただ金の子牛だけは手をつけずそのまま残してしまつた。その結果、主からこう言われた。10章30節です。「あなたはわたしの目になつたことをよくやり遂げ、アハブの家に対して、わたしが心に定めたことをことごとく行つたので、あなたの子孫は四代目まで、イスラエルの王座に就く。」

### 4) ダビデに語られた約束

よくやり遂げたのだから、あなたの子孫は永遠にイスラエルの王座に就くと言われるかと思つたら、四代目までという制限がついた。四代も続くのだから喜ぶべきかもしれませんが、でもダビデ

はこう言われたのです。「わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」(サムエル記第27章13節)

エフーは四代目まで。しかしダビデはとこしえまで。この差は歴然です。すばらしい信仰者だと言われたエフーでさえ四代目でエフー家は途絶えてしまいます。それに対して南ユダ王国はダビデの血を確実に受け継いでいく。ここに大きな違いがあります。

## 3 神

### 1) 過去を振り返り主の約束の確かさを知る

このことから、二つのことが見えてきます。

一つ目。列王記を見てきておわりの通り、北イスラエルと南ユダにいろいろな王が出てきました。そのほとんどが「主の目に悪であることを行う」ような人たちで、そろいもそろって碌な王様はいない。これが、神の国と言われるイスラエルの王の現実でした。こんな頼りない王様が続くと、だんだん心配になります。これではとてもダビデに約束された主のご計画は実現されないのではないか。今日のところでは、ダビデの血を引くアザルヤからその息子ヨラムへと王位が受け継がれてはいきます。でも北イスラエルではシャルムがクーデターを起こしてゼカリヤ王を殺し、エフー家の血筋は断絶してしまつた。北イスラエルでこうなのですから、南ユダでもダビデ家が断絶してもおかしくないのです。

しかし私たちは知っています。約束のとおりダビデの末から主イエス・キリストがイスラエルの王となるために私たちのところに来てくださいました。ダビデ家は断絶しなかつたのです。これは不思議なことです。立派な王様が続いたから断絶しなかつたのか。とんでもない。信仰もあやふやで罪から離れようとしない王が続いていった。それなのに、主の約束は破られなかつたというのです。これが今日のところから教えられる一つ目のこと。

### 2) 未来の約束の確かさを信じる

次に二つ目のこと。過去を振り返ってみて、主の約束は確かであつたというのなら、ではこれから先の未来のことについてはどうなるか。未来についても主の約束は確かであるということになります。

いま、イスラエルとパレスチナの紛争のこの先のことについて、世界中の人々が心を痛めています。また私たちも、イスラエルという国が関わっていることですから、信仰者としてどう考えたらよ

いのかと戸惑います。いろいろな意見が飛び交っていますが、どれが正しいのか判断も難しい。しかし、一つだけ確実に言えることはある。神はなんと語ったか。12節をもう一度読みます。「主がかつてエファーに告げられたことばは、『あなたの子孫は四代までイスラエルの王座に着く』ということであったが、はたして、そのとおりになった。」

過去を振り返れば、主が語ったことばの通りのことしか起きなかった。それで私たちは聖書のことばは真実だとわかります。もし聖書に書いてあることが起こらなかったというのならどうなるか。だれも聖書を信じません。

### 3) 主を待ち望む

今世界で起きている戦争や紛争について、この先のことはだれも確かなことは言えません。けれども私たちにはわかっていることが一つある。それも確実に起こるということを知っている。なんですか。ダビデに語られた主の約束です。あの約束は必ず成就する。二千年前、イスラエルの王として約束どおりに来られた方は、もう一度約束のとおり私たちのところへ来られ、神の国に招いてくださいます。主はこう言われました。「不法がはびこるので、多くの人の愛が冷えます。しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。」（マタイ24章12, 13節）

人と人がますます憎み合うような時代です。どこにも救いが見えない世に見えても、主は耐え忍ぶようにと励ましてくださいます。主の約束を信じつつ、この一週間を歩んでまいります。